

「あきらめない」小さな一歩が未来につながる！ 「夢・挑戦・達成」の教育を追い求めて

大橋節子 (学校法人 創志学園学園長)

はじめに

ご縁をいただいて、日本子ども学会に昨年 2013 年 10 月から活動に参加させていただくことになった。身を引き締めて、その役に相応しい活動や研究をしていかねばと考えている。

創志学園グループの創立は、1966 年。まもなく半世紀を迎えるが、この 50 年、教育への思いはぶれることなく、目の前の子どものために全力投球をすることであった。教育で今やらねばならぬことを、必要とされている教育を、ひたすら子どもの目線で探し求めてきた。

不登校からの回帰教育への挑戦

教育の仕事に携わり 36 年。特に 1980 年代後半、「登校拒否」や「高校中退」が社会問題として取り上げられ始めた頃からの 27 年間を、不登校児童生徒とともに過ごしてきた。

かつて大人は、子どもはみんな学校が大好きで、楽しく学校に通っていると考えていた、また、少々辛くても通うことが当たり前なのが学校だとも認識していた。しかしある日、多くの子どもたちが、突然のように「学校に行かない、行けない」という事態に陥った。1948 年から文部科学省によって実施されてきた学校基本調査の統計にも、1952 年から不登校児童生徒数の調査が加えられた。長期欠席児童生徒数の調査項目が付け加えられ、随時調査項目の追加や見直しが行われ、現在の調査に至っている。我が国においては、1959 年頃から不登校問題が臨床現場で注目され始めた(稲村、1994)。

1990 年代、ついに不登校児童生徒の数は 13 万人を突破。2002 年 9 月、文部科学省は、「不登校問題に関する調査研究協力者会議」を発足、2003 年 5 月付けで「不登校対応の在り方について」で詳細に不登校児童生徒への対応策を発表した。ついで、2004 年には、不登校に対する欠席の緩和的取り扱いの調整策といえるものも打ち出し、矢継ぎ早に不登校対策に取り掛かった。

しかし、学校に「行けない、行かない」のは、母親に、子どもに、いや学校に問題があるのだと、その原因探しや責任の所在をあれこれと考えているうちに、状況

の「複雑化・複合化」が進んだともいえる。最近では「いじめ」や「自殺」という深刻な事態も起こり、調査に調査を重ねても、その解決の糸口をいまだ手繰り寄せることができていないといえよう。

学校に行こう！

我が国で、高校の中退が新聞紙上を賑わしていた 1986 年、「学校嫌い」「登校拒否」と言われる子どもたちが「休みたくない学校・行くのが楽しくなる学校」の教育プログラムを具体的に示したいと、我々は「高等専修学校 国際自由学園」を創設した。激化した受験競争に子ども達が疲れ果てていた時代に、本当にやりたいこと、なりたい自分を見つけるための学校として掲げたテーマは「15 の春を泣かせない、多様な進路選択を今ここに」であった。

さらに 6 年後の 1992 年、学校という枠にはまりきれない子ども達のためにと、国際自由学園を礎に創立したのがクラーク記念国際高等学校(以下、クラーク高校)であり、その校訓は「君よ大志を抱け」である。これは、ウィリアム・スミス・クラーク博士が、離日の際に教え子たちに残した「Boy's be ambitious!」を、クラーク家承認のもとに今に受け継いでいる。クラーク博士は 1876 年に来日し、札幌農学校の President(日本での役職は教頭)となった。1877 年に離日するまでのわずか 7 カ月という極めて短い期間のなかで、後に近代日本の礎となる優れた人材を輩出していることでも知られている。

現在、クラーク高校は、通信制高校では日本で最も多くの生徒が在籍しているが、創立当初から、子ども



ウィリアム・スミス・クラーク博士
(William Smith Clark, 1826 年
7 月 31 日 - 1886 年 3 月 9 日)



三浦 雄一郎校長 80歳 7カ月エベレスト頂上から (写真提供：三浦ドルフィンズ)

達への「一対一対応」教育に専念し、一人ひとりの子ども達の持つ「大志＝夢」を引き出すための教育活動を22年経た今も変わらぬ思いで続けている。

オンリーワンこそ大切！ 校長は世界一の冒険家

クラーク高校では、三浦雄一郎（81）校長が、全国約1万名を超える生徒を夢実現に向かって牽引している。三浦校長といえば、2013年に大いに日本中の話題になった、80歳と7カ月で世界の最高峰エベレスト（8848 m）の3度目（70・75・80歳）の登頂に成功した人物である。クラーク生たちは、とてつもなく大きな校長の背中を見て育っているといえる。

「あきらめなければ必ず夢の頂上へ」。三浦校長の言葉が、行動が、常に子ども達の挑戦を後押ししている。前回の登頂で三浦校長は、「苦しくて、辛くて」、でも「最高の気持ち、家族に感謝」と頂上で述べ、どんなに辛い思いをしても、自分が決めた目標を達成する喜びを、それを支える家族への感謝を、言葉で示したのが印象的であった。クラーク生達は苦しくて辛い道のりを、一步一步頂上に向かって歩みを進める校長の姿に、ひたすら努力することの素晴らしさを感じながら眺めていたに違いない。

三浦校長は、これまでもずっとクラーク生の育成に「ナンバーワンよりもオンリーワン」が重要であると、子ども達の持つ個性を尊重してきた。1987年、『青春のコロンブスたちへ』と題して、クラーク高校の前身である、国際自由学園の校長に就任した当時のメッセージが残っている。

「新しい時代と人それぞれの人生の、目がくらむばかりの可能性を想像するには勇気が必要です。教育は未来の可能性を実現させるためのもの。…中略…心も体もしなやかな若者時代こそ、心気をみなぎらせ、この可能性にチャレンジできる時なのです。そのために

は、人間の能力は想像をはるかに超えるほど深く偉大であること。人間の意志もまたはるかに越えうるものであったことを知るべきです」。校長就任から26年目を経た今も、「頑張れ」と声をかけるだけでなく、校長自身が子どもたちの手本となり、あきらめない、くじけない、人間の持つ本来の力の大切さを伝えている。それが、クラーク高校なのだ。

パフォーマンスコースの活動概要

クラーク高校には、パフォーマンスコース（東京）がある。柔軟な通信制高校のカリキュラムの特徴を活かし、パフォーマンスコースの授業を組み立てている。その授業には、劇場を使った本格的な公演を始めとして、地域の行事や施設の訪問等のボランティア活動が用意されている。教員は俳優や舞台演出の経験者、活動分野別のプロのパフォーマーで、専用スタジオを使い、ダンス・芝居・インプロビゼーション（俳優の演劇活動トレーニングのメソッドとして考案されたもの。役者に必要な演技力を高めるために開発され、様々なゲームやフォームがある。アイデアを生かしあい、台本などの決まりごとが何もないところから役や関係性を築き上げる即興劇）・歌・ラップ・殺陣の指導を行っている。

明るく楽しい不登校といえれば誤解があるかもしれないが、不登校という人生の大きな壁を乗り越えて、懸命に体得したパフォーマンスを観てもらうことで、感動を呼び起こせることに喜びを知り、厳しい稽古（訓練）を重ねても頑張る子ども達。中学校時代は一度も登校したことがなかったという生徒も「学校に通うことが楽しくて仕方ない」と語り、上級生、同級生、下級生の視線にも恐怖心や嫌悪感を覚えていた生徒も「みんなといることが幸せ、みんなのためなら何でもできる、下級生も可愛い」と微笑みが溢れる。

開講して15年目を迎えるこのコースでは、数々の



パフォーマンスコース定期公演

卒業生がアイドルから本格派の舞台俳優として現在活躍している。今、私はこのコースの生徒を対象に、レジリエンス(精神的回復力)と学校適応の関連についての研究を始めている。明るく元気な生徒の姿を見るにつけ、なぜここまでの優しさと愛情に満ち溢れる魅力的な子ども達に育ったのか、身体活動を中心に据えたパフォーマンス活動が、不登校回復にどのように寄与しているのか、検証してみたいと考えるようになったからである。今後このようなパフォーマンス活動から、不登校回復のための教育プログラムを完成させていきたいと考えている。

27年にわたり不登校生徒、またその家族の苦しみ状況に接してきたが、実はどんな状況にあっても、子ども達は決して折れたり壊れたりしてしまわないことがわかってきた。

芯にもつ「個性的な強さ」「才能の豊かさ」を活かして、逆境から回復し、大輪の花を咲かせた子ども達が本当に大勢いるのだ。どんどんできることから挑戦させていく、失敗しても大丈夫と伝えることが大切である。「夢・挑戦・達成」をスクールモットーとしているクラーク高校では、子ども達が自分の将来に夢を持ち、そのために小さな一歩を確実に踏み出すための応援をしている。夢への挑戦のなかで、成功や失敗を繰り返しつつ自分に自信を取り戻し、自分の良さに気が付いていく。挑戦が達成した暁の喜びは、次の夢を生み出す。「夢・挑戦・達成」の良い循環に乗った子ども達はどこまでも自分の力を信じて進みだすのだ。

「生きてるってすごい！」 いのちの価値を子ども達に

教育の原点は、「生きる喜び」を感じる「感性」の育成にあるのではないだろうか。生きていることの素晴らしさを、身体全身で感じる力を育てることが、何よりも大切なのではないかと思う。2003年8月26日、私は急性リンパ性白血病を告げられた時に、「命の尊さ」をひしひしと感じた。病気の苦しみや痛みの辛さは、他人には理解してもらうことは難しい。しかし、誰かに支えてもらわなければ、一人では生きていくことは決してできないのだと学んだ。今、病気で得た経験を教育に活かしていることがある。それは子ども達の状態を、決して外からだけ診て決めつけないことである。子ども達が苦しくて辛い時ふと見ると、いつも寄り添って見守ってくれていると感じる温かい眼差しを投げかけていくことに徹していきたいということである。子ども達が自分自身で生きてみよう、生きたいと思うことが重要なのだと考えている。

「生きる喜び」を感じる

「生きる楽しみ」が見つかる

「生きたい」と願う

「生きる尊さ」が分かる

「生きる奇跡」を喜ぶ

このようなことを子ども達に体得してもらえるような教育に取り組みたいと思っている。白血病からサバイバルし10年が経った。「生きる奇跡」を喜ぶ自分がここにいる。子ども達との出会いこそが、そう思わせてくれた。出会う子どもたち一人ひとりが見える教育の創造と、同じ思いにたてる教員の育成に挑戦していこうと決意している今日この頃である。

〈参考文献〉

- 稲村博 1994 不登校の研究 新曜社
- 小塩真司・中谷泰之・金子一史・長峰伸治 2002 ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性—精神的回復力尺度の作成— カウンセリング研究、35、57-65
- 小塩真司 2011 レジリエンス研究からみる「折れない心」深谷和子(編集代表)・新井邦二郎・沢崎達夫・諸富祥彦・大数見仁(編) 児童心理 金子書房 pp.62-68
- 文科省 2003 不登校への対応について
- 文科省 2013 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査

クラーク記念国際高等学校概要

- ・広域通信制高等学校として現在指導拠点は、36都道府県61か所。生徒数：11、953名(2014年1月現在)
- ・小・中学校で不登校経験のある生徒が半数程度在籍し、他校と比較してもその割合は著しく多い。
- ・不登校経験のある生徒の通学には、生徒の状況により通学日の軽減や、学習面でのサポートなど、個々の回復に合わせた集団授業や個別授業を実施。
- ・進路変更によるコース間の移動も、生徒、保護者、教員間の話し合いが行われ希望に応じて認められ、不登校再発や中退の防止に向けた取り組みがなされている。
- ・通信制高校であるが、「登校すること」を基本にした「全日型通学方式」に特徴があり、不登校経験のある生徒へ登校を前提とした不登校回復に働きかける教育のアプローチがなされている。
- ・国内外への大学進学など、進路選択も豊富で、在籍中に短・中・長期での海外留学が可能である。
- ・2014年ソチオリンピックにおいて、卒業生である竹内智香さんがスノーボード女子・パラレル大回転で銀メダルを獲得。